

長谷川聡常務が次期社長に内定

川崎重工は、2月23日の取締役会において、大橋忠晴社長の後任として長谷川聡常務が第14代社長に就任することを内定した。大橋社長は代表取締役会長に就任する。

取締役会後に行われた記者会見では、大橋社長は次期社長について「リーダーとして必要な事業に対する強い愛着と執着心、判断のバランスの良さ、優れた国際的ビジネス感覚を兼ね備えている」と述べた。これに対して長谷川次期社長は「経営環境は大変厳しいが、このような時期は社会も変革しており、新たなニーズも求められるはずでチャンスとも言える。グループ力を結集して新事業への技術革新を促進させ、社会的使命達成と企業価値向上に最善を尽くしたい」と抱負を語った。

2009年6月25日に開く株主総会終了後の取締役会において正式決定される。

大橋忠晴社長と
長谷川聡・次期社長(右)。



「カワサキグリーンガスエンジン発電設備」の実証運転で世界最高水準の性能を実現

川崎重工は、上越エネルギーサービス(株)(新潟県上越市)内で系統連係運転中の「カワサキグリーンガスエンジン発電設備」実証プラントにおいて、1年間の実証運転(累計運転時間4,000時間)を完了した。

「カワサキグリーンガスエンジン」は、世界最高の発電効率48.5%、世界最高水準の低NOx排出量160ppm(O₂=0%換算)を誇り、経済性・環境性に優れた画期的なガスエンジンである。

今回の実証運転では、シリーズ最大機種

の「KG-18グリーンガスエンジン」(発電出力:7,800kW)を用い、上越エネルギーサービス内でDSS運転(毎日、朝起動して夜停止する運転パターン)を基本とした系統連係運転を行なった。その結果、季節変動の中でも世界最高の発電効率と、低NOx排出量を安定して実現した。これは、従来の同クラスのガスエンジンと比較して、燃料費を5%以上削減し、また、NOxについても国内ほぼすべての地域で脱硝装置が不要となる水準であることを実証したものである。



枚方市に最新鋭ごみ処理施設を納入

カワサキプラントシステムズ(以下、Kプラント)は、大阪府枚方市に最新鋭のごみ処理施設(処理能力240t/日(120t×2炉))を納入した。

本施設は、「環境への負荷において世界最高水準を目指す」というコンセプトの基に、Kプラントが自社開発した最新鋭のストーカ式焼却炉を採用したごみ焼却設備や燃料式灰溶融設備などで構成されている。また、余熱利用の発電設備として蒸気タービン1基(発電出力:4,500kW)を備え、発電電力は主に本施設の稼働電力として使用する。

このストーカ式焼却炉では、ごみを送る方向に炎の流れを並行させる炉形状とすることにより、従来型より少ない空気量でごみを完全燃焼させ、かつ灰中の未燃成分の発生を抑制できる「カワサキ 並行流ストーカ式焼却炉」ならびに、ごみを送り燃焼させる火格子を水冷することで

焼却炉の耐久性を向上させた「カワサキ水冷火格子」を採用している。



本施設は、ダイオキシン類排出基準、排ガス規制、排水規制および灰などの溶出規制などの厳しい基準をすべてクリアするとともに、上記最新技術によって、一層の環境負荷低減を達成した。

0系新幹線の先頭車両が26年ぶりに川崎重工・兵庫工場へ

2008年12月に引退した0系新幹線の先頭車両が、西日本旅客鉄道(株)(JR西日本)から川崎重工に譲渡され、3月18日、兵庫工場へ帰ってきた。

この車両は、昨年12月の「さよなら運転」の際、新大阪発博多行き「ひかり347号」として最後の運行に使われた車両である。1983年に兵庫工場で製造したもので、26年ぶりに「ふ



さと”に帰ったことになる。先頭車両はJR西日本・博多総合車両所から搬送用のトレーラで陸路を博多港に運ばれ、博多港から神戸港に

海上輸送された。川崎重工では、貴重な鉄道資料として保存展示することになっている。

新型ホイールローダ「AUTHENT 135ZV-2」を新発売

川崎重工(現(株)KCM)は、新型ホイールローダ「AUTHENT 135ZV-2」を新発売した。

本機は、バケット容量9.7m³の超大型機で、最新鋭の技術を投入した川崎重工のフラッグシップモデルである。最大出力537kW(730PS)のV型12気筒・30リッターエンジンを搭載し、余裕のある作業能力を実現した。また、今回新たに、作業効率を向上させて低燃費化を図るエフィシエント・ローディング・システム(ELS)や、プレーキベダルのインチャング作動位置を任意に設定

できるインチャング・コントロール・システム(ICS)を搭載。さらに、メンテナンス性を向上させる故障診断機能を備えたマシン・オペレーション・ダイアグナスティック・モジュール(MODM)などの新技術を盛り込むことで、現行機に比べて作業効率、耐久性、信頼性を格段に高めた。

■主要目

バケット容量:9.7m³
走行速度:0~30km/h
全長:12.9m



全幅:車体4.16m バケット4.52m
エンジン排気量:30リットル
定格出力:537kW(NET)

お問い合わせ先 株式会社KCM 079-495-1211

ロールス・ロイス社の最新鋭旅客機用エンジン「TRENT XWB」の開発・生産に参画

川崎重工はロールス・ロイス社(英国、以下、RR社)と、最新鋭旅客機用エンジン「TRENT XWB」の開発・生産に、リスク&レベニュー シェア

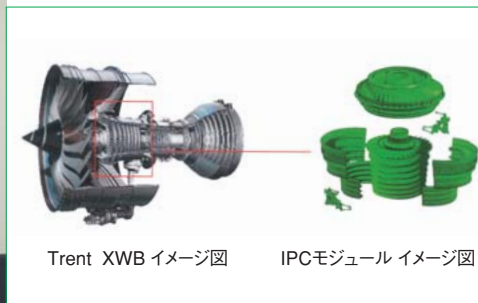
リング パートナー(RRSP:開発・製造コストやリスクを応分負担し、利益の配分を受けるパートナー)方式で参画する契約を正式に結んだ。

「TRENT XWB」は、RR社がすでに開発・生産している5機種種の「TRENTシリーズ」の

最新モデルで、エアバス社(フランス)が開発中の新型旅客機「A350」(250~350席クラスの中型機)への搭載が決定している唯一のエンジンである。

川崎重工は今回の開発・生産プログラムで、中圧圧縮機(IPC)モジュールの設計・製造・組立を担当する。IPCモジュールは、エンジンを構成する8個の主要モジュールの一つで、直径約1.5m×長さ約1.5m、部品数約4,000点のモジュールである。

川崎重工が、このモジュール全体の設計・製造・組立を担当するのは、「TRENT1000」に続いて2回目となる。川崎重工はRR社へ技術者を派遣し、共同でモジュールの開発作業を進めている。



ばら積み運搬船「KOMATSUSHIMA STAR」が進水

川崎造船は神戸工場において、パナマのLUA LINE S.A.(ルア ラインエスエイ)向け55型ばら積み運搬船「KOMATSUSHIMA STAR(コマツシマ スター)」の命名・進水式を行なった。

本船の船型は船首楼付き平甲板型で、5つの船倉を有し、穀類、石炭、鉱石、鋼材などの積載貨物の運搬に適した船倉形状としている。また、川崎造船が開発した抵抗の少ない滑らかな船首形状を採用し、従来船型と比べて燃料の節約を可能としている。今年6月に引き渡

しの予定。

■主要目

全長:約190m、長さ:185m
幅(型):約32m
総トン数:約3万1,000t
載貨重量トン数:約5万5,100t
主機関:川崎-MAN B&W
6S50MC-C MK7×1基
連続最大出力8,200kW×110
回転/分

